

陳述書

大阪地方裁判所御中

平成 19 年(2007 年)12 月 27 日

氏名

住所

私は 市の市立小学校教諭です。2006 年度に、大阪府教育委員会が導入している「評価・育成システム」の評価結果の開示後、苦情申し立ての申請を行いました。この苦情処理の審査結果から見てきたことは、現行の評価制度が職場の教職員の連携を損ない、子どもを切り捨てていくものというものです。以下に意見陳述いたします。

記

1. 職場の様子

現在勤務の職場は所得制限のある住宅がほとんどです。子どもたちは生活が大変苦しい中で育っています。現在、私は転勤して 2 年目で同和教育担当をしています。学校では、年に 3 回、課題をかかえている児童の生活実態とクラスでの様子を交流しあう会議を設けています。子どもの抱える課題が大きく、クラス担任の関わりだけでは、難しい事例がたくさん出てきています。子どもが切れる・暴力・いじめ・親の育児放棄・過干渉・虐待等の報告が聞こえてきます。生活の貧困に直面し、就学援助生活保護家庭も非常に多い(全校生徒数 6 割ほど)なか、いろいろな報告が出てくるのも当然だと思います。顔や体を腫らして登校してくる子、裸で追い出されて叱られているらしい子、外国籍児童へのあからさまな差別、万引き、忘れ物の異常な多さ(教室には鉛筆と消しゴムを常備)、昨年度私自身も子どもの実態に驚愕しながら、共通実践を考えあおうと提案してきました。

2. A への取り組み

私にとって目立ったことだけでもきちんとした引き継ぎがほしかったです。2 年生の時も「A は引きずられて保健室に連れてこられた。」という児童がいました。A は登校時のトラブル等で気持ちの処理ができないとき等、自傷行為、他人への攻撃が始まります。保護者には、彼の様子を連絡し、子育てを見つめてもらおうと取り組みました。管理職を入れた懇談もしています。周りの子へのはたらきかけ、集団作りから少しずついっしょに遊べる、声をかける子が出てきて 1 年間で終わりました。そして、切れる子は他にもいました。

私のクラスについては、全体交流会や生活指導委員会で考え合うことを要望しました。学年では何度も子どもの課題の話を出し、教科交換、算数教科指導のなかでの A への入り込み授業、約束をめぐる学年集会、等々いろいろな取り組みを進めました。

3. 評価根拠への疑問

06年度の、苦情処理申し立てをしました。昨年度開示結果で能力評価 B とあったことの根拠を問うものです。07年5月に審査委員（教育委員会人事担当 ・ ）との聞き取りが教育委員会でありました。前年度の校長からの聞き取りの調書は7月に職場に着きました。前年度評価に不服があっても、今年度の教育活動はすでに3分の1終わっています。

- a. 自立自己実現の支援の項目「本職(校長)も当該学級の様子を見に行き、改善の方策を検討した。」
- b. 「保護者との意思疎通がうまくいかなかったりして、保護者との信頼関係を十分構築できるまでに至らなかった」
- c. 学校運営「いじめ、登校しぶりに心を痛め、ゲストティーチャーを積極的に招聘」と調書に書かれてありました。

a については「学級の様子を見に」こられたのは親たちがいる授業参観時のみで何の問題行動も表れない中でのことでした。(A 児や他の児童へ)「改善の方策を検討したこと」は聞いた覚えはありません。何を検討したのでしょうか。

クラスの A 児は親からは発達障害を思わせることを聞いていて、自傷行為がひどい。

B 児は兄が発達障害かも知れないと聞いていて親の育児放棄と虐待が考えられる。

C 児は兄が小学校高学年の時にすごい荒れ方をし、それを弟がずっと見て育っている。

など学校と地域が抱えている非常に重たい課題を集約しているケースとして「改善の方策を検討」してほしかったと、今更ながらに思います。私自身の明日にも倒れそうな思いであったことがよみがえります。

b については親からは校長に対して次のような声が寄せられています。もっとも学校が荒れた時期（現在の中3生）に兄弟がいる親から校長にたいして「校長はうちの子が荒れた時に力になってくれなかった」と学校不信をあらわにされています。

私自身子どもの教育権を守る教育労働者として、同和教育、子どもの生活実態交流会を位置づけています。「保護者との意思疎通がうまくいかなかった」という課題をあげつらう評価の方法は徐々に職場に自主規制として浸透しつつあります。

若い先生は 君は親からの連絡帳で相当厳しいことを言われているということを学年に出さない。

年は荒れている。しかし子どもの背景が少しも伝わってこない。

荒れている子を出しても「去年はそれほどでもない」と言われる。などますます重い課題の子、親の話題は出さない。交流できないことになりつつある。

しんどいことは隠すのが評価システム実施して以降の我々の現場です。私たち教員は自己申告目標に拘束され、ポイントを稼ぎ、見せ場を作り、他の人もそれを追認します。目標実現のため自主規制が進み、目標はトップダウンで下まで浸透し、管理は達成されます。その地ならしはすでに出来つつあると思います。評価者管理職には子どもと親の本当のことは言えない教師集団、そして子どもを切り捨てる評価システムを実施することにあくまでも反対です。勤務評定反対、差別支給反対！